

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：38001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02669

研究課題名(和文) 琉球・沖縄の伝統文化の継承と琉球語学習の基礎的研究

研究課題名(英文) Basic study of inheritance for traditional culture of the Ryukyu-Okinawa and learning of the Ryukyu language

研究代表者

狩俣 恵一 (Karimata, Keiichi)

沖縄国際大学・総合文化学部・教授

研究者番号：60169662

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)： 琉球語圏の伝統文化の言葉は、支配層のサムレーの中央語と地域の方言に大別されるが、明治以降になると中央語は地方に広まった。また、都市化した那覇を中心に、中央語と日本語の影響を受けると同時に、沖縄芝居をとおして広まった。そして、戦後はラジオ・テレビなどにより急速に普及した。本研究は、琉球語・琉球音楽・琉球古典芸能の関わりを考察することで、琉球の伝統的な精神性と身体技法が失われつつあることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

沖縄の伝統文化の研究と教育は、師範学校を中心に始まった。戦後になると、沖縄の伝統文化の研究と教育は、小・中・高の教職員が独自に担ってきた。その要因は、琉球語及び琉球の伝統文化が教科書に採用されず、沖縄の教職員組合が独自に行わざるを得なかったことと、沖縄の大学が文科省の管轄外にあったからであろうと思われる。

そして、現在においても、小・中・高の教科書において琉球語及び琉球芸能等の沖縄の伝統文化の記述はほとんど採用されず、高校や大学の入試にも出題されていない。本研究がそのような現状を改める契機となることに意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)： The Ryukyu language is classified into the Samure language of the central ruling class of Ryukyu Kingdom and dialect. Since Meiji Period, the language of the central ruling class was affected by Japanese language in urbanized Naha, and spread through all Okinawa areas by performances at many theaters and touring tours called Okinawa-Shibai. After World War II, the language began to spread rapidly by mass media such as radio and television in Okinawa region. In other words, it shows that the traditional things which are inherent in the Samure language have been changing over time.

In this study, by a consideration of the relationship of the Ryukyu language, Ryukyu music and Ryukyu classical performing arts, traditional spirituality and the technique of body expression were lost, that is revealed.

研究分野：民俗学・琉球芸能

キーワード：琉球語 シマ言葉 中央語 琉球文 組踊 古典芸能 沖縄芝居 村踊り

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 琉球語は、奄美語(奄美徳之島諸方言)・国頭語(沖永良部与論沖繩北部諸方言)・沖繩語(沖繩中南部諸方言)・宮古語(宮古諸方言)・八重山語(石垣竹富諸方言)・与那国語(与那国方言)に分類され、琉球諸語とも称される。琉球諸語は、2009年にユネスコから消滅の危機にある言語と認定された。そして、文化庁及び沖縄県と鹿児島県大島支庁は、それらの危機言語の学習及び継承活動を推進するようになった。

(2) 琉球古典芸能の組踊は、1972年に国の重要無形文化財に指定され、国立劇場おきなわが2004年に開場した。また、組踊は、2010年にユネスコから世界無形文化遺産に登録され、琉球舞踊は2017年に国から重要無形文化財に指定された。そして、沖縄県及び国立劇場おきなわが中心となり、組踊をはじめとする琉球芸能の振興及び普及活動を積極的に推し進めてきた。また、琉球諸語の学習及び継承活動は、琉球舞踊や組踊とリンクさせて継承活動を行うようになった。奄美語の継承においても、シマ言葉(方言)の学習と継承活動が「島唄」の伝統文化とリンクして行われている。

(3) 要するに、シマ言葉の学習と継承活動は、日常語を中心にしたやり方と、歌謡語や組踊語とリンクさせて行う活動がある。しかしながら、琉歌や組踊の詞章は、琉球王府のサムレー(士)たちの中央語であり、シマ言葉とは異なる。よって、伝統文化の言葉をシマ言葉の継承をリンクさせるやり方については再検討を要すると思われる。

2. 研究の目的

(1) 琉球王府時代の日常語は、サムレーたちの中央語と地域の方言であったが、それらの日常語は、歌謡語・組踊語とは異なっている。日常語は、時とともに変化するが、歌謡語や組踊語はほとんど変化せず、様式の中で継承されるからである。また、日常語と歌謡語・組踊語の学習目的や学習意識には差異がある。前者の日常語は、生活上必須であり、仕事上の利益につながるが、後者の歌謡語・組踊語は、趣味的教養的な意識で学ばれる。つまり、日常語と伝統文化の言葉は、学習の意識や目的が異なっているのである。

(2) 中央語を日常語とする支配層のサムレーたちは、オモロ・琉歌・芸能を口頭で継承するだけでなく、中央語をベースにした琉球文で記録した。その琉球文は和文から派生したひらがなで表記されており、琉球語(中央語)・琉球古典文学の基本資料である。よって、ここでは、琉球の中央語について検討し、琉球古典文学のテキスト作成のための基礎的な研究を行う。

3. 研究の方法

(1) 琉球語には、中央語と小集落の方言であるシマ言葉がある(筆者は「シマ言葉」と表記するが、沖縄県では「しまくとぅば」と表記する)。また、明治以降には、沖縄本島及びその周辺離島ではウチナーグチ(沖縄方言)と称する方言が広まり、戦後の学校教育ではウチナーヤマトグチ(日本語と混交した沖縄方言)が生まれた。つまり、琉球語には、伝統的な中央語とシマ言葉(方言)があり、明治以降の新方言のウチナーグチと戦後のウチナーヤマトグチを継承している。ここでは、それらの琉球諸語を4つに分けたうえで、伝統的な日常語であるシマ言葉と明治以降に発達したウチナーグチ(沖縄方言)の学習と継承のあり方について検討する。

(2) 琉球文で書かれた、おもろさうし・碑文の音声・発音を知ることができないが、琉歌・組踊の唱え(抑揚のあるセリフ)は、三線歌や芸能のなかで中央語の音声・発音を継承している。しかも、琉歌は舞踊として、組踊は楽劇として、その身体動作を併せて継承する。

換言するならば、三線歌の琉歌や組踊は、本土の能や狂言と同じく古典芸能であり、古典文学として学習されている。したがって、琉球文も、日本語や古文の学習と同じように、学校教育で学習すべきであると考え。換言するならば、学校教育では地域の日常語であるシマ言葉(方言)の学習よりも、琉球文による琉球語(琉球古語)・琉球文(琉球古文)を学習すべきであると考え。

4. 研究成果

(1) シマ言葉とウチナーグチが衰退した要因

小集落の日常語のシマ言葉の衰退は、方言札に象徴される方言禁止教育が要因であると言われている。確かに、方言札に象徴される方言禁止教育は、明治から戦前かけて行われた。また、戦後の教育では、戦前の方言を強く否定する方言禁止教育ではなく、「共通語奨励教育」であった。というのは、「就職や進学で、シマ(小集落)を離れて生活するようになったとき、共通語が話せないと困るから」という理由で、共通語の奨励が行われたからである。

ところが、厳しい方言禁止教育を受けた戦前・戦中の世代のほうが、シマ言葉やウチナーグチを達者に話すことができた。また、戦後の日本語奨励教育を受けた七十代~六十代の皆さんは、潜在話者となった。潜在話者とは、「伝統的なシマ言葉やウチナーグチを話すことができなくても、聞くことはできる人」のことである。そういうわけで、「方言禁止教育」や「共通語奨励教育」が、シマ言葉やウチナーグチを衰退させたという従来の説には首肯できないところがある。

戦前・戦中の方言禁止教育を受けた八十代以上は、伝統的なシマ言葉やウチナーグチを達者に話せる。また、戦後の日本語奨励教育を受けた六十代~七十代は、潜在話者であると同時に、新たなウチナーヤマトグチ(日本語的な沖縄方言)をも話すようになった。その新方言は、若者言葉として現在に至っている。要するに、シマ言葉・ウチナーグチの衰退は、方言禁止教育や共通

語奨励教育が要因ではなかったということである。

シマ言葉・ウチナーグチの衰退は、社会的な生活環境の変化によるものが大きく、住民の移動・転居が大きな要因であったと考えている。明治～戦前・戦中の出征兵士や本土・台湾などへ移住した人々は日本語を話せるようになった。彼らは帰郷すると、シマ言葉と共通語を話すバイリンガルとなり、小集落でも日本語を話せる人が増えた。戦後には、県内各地から寄り集まった西表島や石垣島などの開拓村では、シマ言葉よりも日本語を共通語として話すようになった。また、ラジオやテレビの普及は日本語を自由に話せる人を増加させた。そして、その世代が高齢化すると、シマ言葉やウチナーグチを話せる人が減少し、共通語を話すのが一般的になった。

(2) シマ言葉・ウチナーグチの学習と継承の問題点

シマ言葉は、奄美語・国頭語・沖縄語などよりも小地域の方言である。例えば、八重山語には、石垣島の宮良・白保・川平などの小集落のシマ言葉があり、竹富島・黒島などのシマ言葉がある。それに対して、ウチナーグチ（沖縄方言）は、沖縄本島及びその周辺離島を含む広域の方言であり、先述したように明治以降の新しい方言である。

そして、日本語はウチナーグチに影響を与え、ウチナーグチはシマ言葉を侵略し、戦後には若者言葉のウチナーヤマトグチが広まった。要するに、琉球語圏の方言には、シマ言葉・ウチナーグチ・ウチナーヤマトグチがある。しかし、沖縄県では「しまくとぅば」という一つの言葉で、シマ言葉とウチナーグチの学習と継承活動を行っている。つまり、シマ言葉とウチナーグチ（沖縄方言）を一括りにして「しまくとぅば」と称しているのである。

また、「しまくとぅば普及センター」は、「しまくとぅば」を「組踊・琉球舞踊・沖縄芝居の基層である」と位置付けているが、それも再検討の余地があると思われる。というのは、組踊・琉球（古典）舞踊の言葉は、琉球王府のサムレーたちの中央語をベースにしており、沖縄芝居の言葉はウチナーグチをベースにしているからである。つまり、シマ言葉とウチナーグチを区別することなく、琉球語の根幹ともいべき王府時代の中央語をも無視された形になっている。その要因は、中央語・シマ言葉・ウチナーグチを一括して「しまくとぅば」と称したためであると思われる。

(3) シマ言葉・ウチナーグチの学習と継承について

シマ言葉は、地域の伝統的な日常語であり、方言である。また、ウチナーグチ（沖縄方言）は、那覇の庶民の言葉を中心に首里のサムレーたちの中央語の影響を受けた琉球語の一方言である。そして、それらの方言は次の世代へと受け継がれるべき大切な言葉であるが、各地域の特性を持つ数百といわれる膨大な数のシマ言葉（方言）を残らずに継承しようとすることは無理であると考えられる。

というのは、言葉の習得には、入試や就職を目的とする実用的な学習と教養主義的な学習に分かれるからである。例えば、英語・古語・漢語を学習する目的は、入試や就職の実用性を目的とする人たちと、趣味・教養・研究のために学習する人たちに分かれる。前者は中高生や大学生などであり、後者は高齢者や研究者などである。

ところが、奄美・沖縄のシマ言葉の学習・継承活動は、前者の実用性でもなく、後者の趣味・教養・研究のためだけでなく、歴史的社会的な使命感が原動力になっているようである。したがって、シマ言葉・ウチナーグチの学習と継承は、それを継承する地域の人々の強い意思と絆が必要である。換言するならば、シマ言葉の学習は、継承意欲の強い地域の人々が推進役となり、文化庁・県・市町村はサポート役にまわり、人的・資金的な支援をすることが望ましいと考える。

(4) 琉球語・琉球古典文学の学習と継承について

琉球語圏の中央語は、王府のサムレーたちの言葉であり、琉歌及び組踊の言葉は王都首里のサムレーの言葉をベースにして成り立っている。その書き言葉の琉球文も、中央語としての役割を果たしてきた。中央首里のサムレーをはじめ、宮古や八重山の島役人に至るまで、琉球文を学び、琉歌や組踊本が読まれた。東恩納寛惇によると、組踊本は琉球の歴史書として読まれたというが、これは謡本が武家たちの歴史書・教養書であったのに似ている。

ところで、古文では、和歌・物語・随筆・謡曲などを、中学・高校の検定教科書で学び、入試問題にも出題される。そして、大学・大学院では研究者や教育者を養成してきた。また、国語では現代文・古文の他、漢文も学習する。したがって、仮名文字から派生した琉球文も検定教科書に組み入れられるべきであり、入試問題でも出題されるべきであると考えられる。古文・漢文に加えて、琉球文が古典文学に組み入れるならば、琉球語及び琉球古典文学は世代を超えて学習され、本格的な継承の筋道が開けると考えるからである。

(5) 古典芸能の学習と継承について

琉球の言語文化は、三線歌を大本として音楽と身体で表現する舞踊があり、楽劇の組踊がある。それら琉球の舞踊・組踊は、琉球国の外交の場で披露されたが、その精神性は平和主義の日本国憲法にふさわしい文化遺産である。

しかしながら、平和主義・教養主義の優雅な琉球古典芸能の精神性は、近年に至って娯楽性の強い明るく元気な芸能へと変貌しつつある。その要因は、琉球舞踊や組踊の古典芸能は県民の宝であり、県民の総参加によって継承すべきものという考えのもと、歴史的社会的な使命感が強調されるようになったからであろうと思われる。

よって、琉球舞踊や組踊の学習と継承は、県民が一丸となって継承すべきではなく、それらの精神性を尊び、趣味・教養として継承するのが望ましいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 狩俣 恵一	4. 巻 第23巻第1号
2. 論文標題 長者の大王の成立と伝播 中央と地方の言葉と芸能	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 沖縄国際大学 日本語日本文学研究	6. 最初と最後の頁 1p - 14p
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田場裕規	4. 巻 第23巻第2号
2. 論文標題 瀬戸内の万葉ノート(二)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 沖縄国際大学 日本語日本文学研究	6. 最初と最後の頁 61p-71p
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田場裕規	4. 巻 第67巻6号
2. 論文標題 沖縄から考える 第三項 死者の言葉が生きる島	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 48p - 49p
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣 恵一	4. 巻 -
2. 論文標題 渡嘉敷守良の記録資料と折口信夫	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 渡嘉敷流 二代目渡嘉敷守良襲名披露公演パンフレット『源遠長流』	6. 最初と最後の頁 27-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣 恵一	4. 巻 -
2. 論文標題 琉球古典舞踊の継承について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 安座間本流清風会一扇会 第二回久手堅一子独演会パンフレット『一会の舞』	6. 最初と最後の頁 13-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田場 裕規	4. 巻 22 (2)
2. 論文標題 瀬戸内の万葉ノート (1)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 沖縄国際大学日本語日本文学研究	6. 最初と最後の頁 127-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田場 裕規	4. 巻 22 (1)
2. 論文標題 意匠としての文学 「人相鴨」考	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 沖縄国際大学日本語日本文学研究	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣恵一	4. 巻 第四十三号
2. 論文標題 アイヌ・奄美・沖縄の日常語と伝統語の継承について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 口承文芸研究研究	6. 最初と最後の頁 37-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣恵一	4. 巻 第42号
2. 論文標題 シマ祭りの芸能と王府芸能	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 南島文化	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩俣恵一	4. 巻 第65号
2. 論文標題 首里城の空間力の強化を	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 沖縄国際大学南島文化研究所所報	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田場裕規	4. 巻 16-17(合併号)
2. 論文標題 一七一九年・組踊上演、二〇一九年・首里城火災	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 奄美沖縄民間文芸学	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田場裕規	4. 巻 24巻1号
2. 論文標題 組踊「執心鐘入」と演出 研究上演「沖縄古典芸能を考える」を例に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 沖縄国際大学日本語日本文学研究	6. 最初と最後の頁 105-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 狩俣恵一
2. 発表標題 沖縄の地域社会における芸能の力 与那国島の祭りと芸能を考える
3. 学会等名 与那国フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 狩俣恵一
2. 発表標題 祭りからシマを探る 祭祀・芸能を継承するエネルギー
3. 学会等名 沖縄国際大学南島文化研究所
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 狩俣恵一
2. 発表標題 沖縄・竹富島の祭り歌
3. 学会等名 岩井窯
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 狩俣恵一
2. 発表標題 琉球・沖縄の言語文化とその継承について
3. 学会等名 円光大学グローバルアジアセンター（大韓民国全羅北道益山市）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田場裕規
2. 発表標題 琉球・沖縄の芸能文化
3. 学会等名 円光大学グローバルアジアセンター（大韓民国全羅北道益山市）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田場裕規
2. 発表標題 与那国島の祭事の芸能
3. 学会等名 奄美沖縄民間文芸学会（名護大会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 狩俣 恵一
2. 発表標題 沖縄の「伝統的な言語文化」と「シマ言葉」の継承について
3. 学会等名 日本口承文芸学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 狩俣 恵一
2. 発表標題 八重山芸能の世界 八重山舞踊の成立とその継承を考える
3. 学会等名 八重山芸能を考える連続講座（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 狩俣 恵一
2. 発表標題 竹富島・種子取祭の継承と映像について
3. 学会等名 國學院大學 学術資料センター研究フォーラム「戦前・戦後の沖縄写真 - 画像アーカイブの意義と活用 - 」(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 狩俣恵一
2. 発表標題 与那国島の伝統芸能 三線歌・舞踊・組踊・狂言
3. 学会等名 与那国フォーラム(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田場裕規
2. 発表標題 『琉球板本六諭衍義理大意』のことは学び
3. 学会等名 沖縄文化協会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 狩俣恵一 編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 尚生堂	5. 総ページ数 104
3. 書名 『組踊の精神性と唱えの研究』(基盤研究C、研究課題番号 17K062669、研究課題名「琉球・沖縄の伝統文化の継承と琉球語学習の基礎的研究」報告書)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	田場 裕規 (Taba Yuuki) (80582147)	沖縄国際大学・総合文化学部・准教授 (38001)	